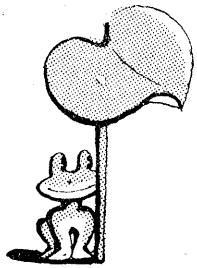
一年保育と二年保育の問題（その五）



鹿野京子

S子に就いて母親から相談を受けたのは、五月も半ばすぎる頃でした。はじめの一週間程は近所の友達に誘われて元気に通園して居たのが、その後とかく登園をしぶり、毎朝送り出すのに一苦労すると言うのです。つい二、三日前もなだめすかして幼稚園迄送って行き、漸く担任の先生に預けてホッと一息する間もなく、母親の後を追って帰って来ました。家庭ではすでに二人の姉であり、体格もよく、知能も普通、近所に同じ年頃の遊び友達もあり、その中の一人は一緒に通園するので、かねがね楽しみにして居た幼稚園生活です。S子にいろいろ訊ねて見ても一向に原因がつかめず、困りはてて居ると言うことでした。矢張り担任の先生によく相談するようにとすすめて置きましたが、その後暫くして判明した事項は次の様でした。

S子は一年保育児として入園しましたが、組の半数以上は昨年から引続き在園する二年保育児が占めて居たのです。最初の中は新しい部屋、新しい先生、自分達も又新年長児としての緊張がありましたが、その中思いのままにふるまいはじめました。N子もその一人でした。N子は自分の優越感を誇示する対象としてたまたま隣席のS子を求めたのです。S子の馴れぬための一寸したまごつきも大きくはやしたて、衣服や持物のことまでとやかく言う。それに対して対等に立ち向って行けるほどS子は未だ新しい環境には馴れて居りませんでした。他のことでは幼稚園は決して嫌いではなかったのですが、そのことだけが登園の足どりを重くして居たのです。

「おかげさまでこの頃は毎朝機嫌よく出かけます」との便りを受取ったのは秋も酣の頃でしたか。

翌年S子の母親は弟のM夫を今度は二年保育児として入園させました。S子の例があり、それに親戚の家でさえ母の背にかくれて居る程内気なM夫にこそ、一時も早く集団生活を通してよい社会生活の経験を得させたいと願ったのです。「遊びの中から先生の姿が見えなくなると、M夫も又、何時の間にかその遊びから抜けてしまうのでしたが、この頃漸く進んで仲間に入るようになりました。折角馴れましたのに四月にはまた先生も組も新しく変ることでしょう。先生は当分新しい子

ども達の世話にお忙しいことでしょうし、そうなるとM夫はまた安定を失ってしまいそうで――」

心身の発育も正常で、特に近隣の友達との遊びを通して社会性の発達して居る幼児にとっては、新しい環境への順応も比較的容易に行われるでありましょう。この姉弟の場合はむしろ少い例であるかも知れません。しかし、一年保育、二年保育の問題について、母親も亦その合併教育に、幼稚園教育の年限に、決して無関心であり得ないことを知らされるのです。

幼稚園教育の年限について

一年保育か、二年保育か　人格の基礎は生後五カ年の間につくられると言われる。それ程重要な幼児期によい幼稚園環境の下に発達段階に相応しい生活経験を得ることが出来れば、幼児の幸せはこの上もありません。

なるべく多数の幼児に幼稚園教育を与えるために、一年保育を優先的に入れる場合もありますし、又経済的な面から、せめて一年と言うこともありましょう。けれど幼稚園教育の目標達成のためにも、又幼児の社会性の芽生える年齢の上からも、就学前二年の幼稚園教育が必要であり、又適当と考えられて居ります。

近年家庭に於いても幼児教育に対して関心と理解を示しては居ますが、幼稚園が集団生活を通して行う社会性の教育の面では、如何に周到に教育的な配慮がなされても家庭のみでは果すことが出来ません。さればこそ社会性の芽生える時期にすべての幼児、殊に何等かの事項で正常な発達の阻害されて居る幼児は尚更のこと集団生活の中に正しい指導を受けさせたいと思うのです。

これを亦教師の側から言えば、子供一人々々の能力や性格に応じて指導を行う上からも、個々の家庭環境、心身の発達状況、特質、傾向等をよく見極めて居なければなりません。何れの側からも第一年目はいわば基礎を培う時期、第二年目こそはじめの一年の経験の上に立って更に充実した生活経験が頼まれるのではないでしょうか。

家庭との連絡の上から見ても、母親達の園の教育方針への理解も協力も、一年よりは二年目と活潑になって来るようです。

以上の理由から二カ年の教育、そして出来得れば、第二年目も組編成はそのままに、教師も持上りが望ましいと思います。

一年保育児と二年保育児の混合編成は

発達段階に即した指導をと考えれば一年保育児と二年保育児とは当然別々の組編成が望ましいのですが、実情としては何うしても混合しなければならない場合も起って来ます。

一年保育児と二年保育の年少児を同じ組に編成した場合は、幼稚園の生活経験は同じでも、年齢による発達上の相異がいろいろな面にはつきりあらわれて来ます。この差異はある場合には年長児と年少児の協力関係によい効果をもたらす場合もあるのですが、多くの場合別々のグループにわけての指導が必要になって来ましょう。カリキュラムも一応年齢別にたてて見る或いは取扱いの上で巾をもたせるなどなみなみならぬ心配りが要ります。

二年保育の年長児と一年保育児の合併の場合は、一年間の生活経験の差が問題になって来ます。又夫々の人数の占める割合も考慮に入れなければなりません。

例えば私の園では二年保育を原則としますので、大部分（80％）の二年保育年長児の中の少数の一年保育児（補欠若しくは身体その他の理由で入園のおくれたもの）の取扱いが問題になります。

次に或年三名の一年保育児入園当初の記録を抜萃して見ます。

〈第一日〉

A郎、母の袂に顔を埋める様にして漸くひきずられて来る。

B夫、C子、自分の名札のついた抽出しをあけ、新しい画帖やクレオンを珍しげに眺める。しかし矢張り打ちとけない態度である。緊張を解くため他の子供達と共に園庭に誘う。

小禽舎の兎やせきせいいんこを見ながら話しかけ、餌を与えなどする。その間、A郎、C子は温和しく手をひかれて居るが、B夫は一人かけ出してジャングルで遊ぶ。この遊具が大変気に入って居るらしい。

やがて集合のレコードがかかり、遊戯室に入れた子供を整理するため目を離した一寸の間に、A郎母にすがりついて泣き出す。それにつられてB夫、C子も母を求める。

他の子供達は昨日よりその事をきいて心待ちして居たので、三人に好奇心をも混じえた親愛の情を示して迎える。

A郎は家庭同志懇意な子供の隣席に、B夫は同町内より通う元気なK君と、C子は世話好きで常にリーダー格のE子と同じ机に席を定める。

生活発表を先ず言語で、引続き絵画により行う、他の子供達は待ち兼ねた様に描き出すが、三人は何れも画帖を開いたままクレオンを取り上げ様としない。

それでもB夫はやがて母と私とに交々励まされて、得意の電気機関車を描く、線、色彩共に弱いが、形の把握はなかなか正確であり、表現も正常である。

A郎は市販のぬりえ以外に描画の経験をもたぬと母からきく。

「A郎君、どの色が一番好き？」「――」「赤？」こっくり頷く、手を持ち添えて円を描く、「赤くぬりましょうね、何になるかしら」A郎素直に赤のクレオンでぬりはじめる。

C子は詮衡の際の成績から考えても、家庭の状況から推しても、充分一人で描ける筈である。「何が一番好き？　お人形？　御本？」「お家では誰と遊ぶの？」C子の興味をもつ事柄を求めて努力して見るが、依然として沈黙をまもる、暫く様子を見ることにする。

その間にA郎円をぬり終え、それはりんごになり皿に盛られる。つづいて次の頁に一杯の大きなりんごを今度は一人で描く。

第一日は午前中で終了し、明日は母には玄関の所で帰って貰うよう双方に約束する。

〈第二日〉

多少の困難にあったが、今日は明日の約束通り三人とも母と離す。

積木やままごと遊びに誘い入れても、A郎C子の両人は極めて消極的、窓の近くに椅子をよせて絵本をよんでやる。

B夫は友達と共に見様見真似で紙飛行機をつくり、歎声を挙げながら遊戯室へとばしに行く。

リズム楽器を用いてのリズム遊びに、B夫、A郎はハンドカスタやタンブリンを与えられて頬を紅潮させ、瞳も活気づく、C子は何も手にとらず、首を横にふり、小さな声で「見ている」と言うだけ。

一しきりリズム遊びに興じた後、トロイメライを弾きつつ三人にも「静かに目をつむりましょう」と促すがC子そのままで居る。不

意に「ママー」とC子の泣声、隣席の男児が少し手荒に彼女の肩を押した為である。

「だってねないんだもの」「新しいお友達には親切に教えてあげましょうね」

C子なかなか泣きやまず、A郎の口辺も痙攣し、B夫はと見れば之も亦眼に一杯の涙を漸く耐えて居る、何となく不安な空気が室内に漂いはじめる。そこで予定を変更して片手にC子を抱きながら「お菓子の家」の話を始める。泣声も次第に低くなり、和やかな雰囲気に充たされて来た頃、突然、「おもしれーや、ほんとにおもしれーや」顔に涙の筋をひきながらB夫、精一杯の感情を叩きつけるように叫ぶ。

〈第三日〉

食事前の一時をC子A郎は何れかのグループに属して元気よく園庭をかけ廻って居る。B夫相変らずジャングルが気に入って、側に上って行くと「先生より高いよ」と得意である。此処から室内の配膳の様子を望むことが出来る。三人にとって始めての給食である。

「今日はきっとB夫君の大好きな御馳走よ、早く下りて行きましょうよ」

「いやだ、お友達が呼んでくれなくちゃいやだ」

この一言に思わずハッと胸をつかれる。もとよりその配慮を全然しなかった訳ではないが——、この子供はこんなにも強く友を求めて居る。子供達は声を揃えて呼んでくれた。

「君、おしょくじよ、おりておいで——」

〈第八日目〉

A郎は何となく私の後を追い、C子誘われても何時しかぼんやりと友達の遊びを傍観して居る。この二人を集団に導くためには、先ず私との間の強い感情の結びつきが必要なのである。自由な和やかな雰囲気の中で、彼等に近付いて行こう。

そのために自由遊びの時間を延長する。園庭に、遊戯室に、室内の遊びに誰もが何か楽しんで居る。私は色紙を折る、それに鋏で切込みを入れる。向側にA郎隣にはC子、机を囲む他の子供達は思い思いに紙を折り、鋏で切り、糊で貼る「ぼくもやりたい」不意にA郎が言い出して古絵本の切抜きをはじめる。C子の前に色紙を置くと、そっと取り上げて私と同じ様に折りはじめる。鋏をとって切る。切紙が出来ると黙ってひろげて見せる、又一枚今度は花模様を貼って行く。

「C子ちゃん、上手ね」先生からも友達からも賞められて、むっつり無表情であった顔にも満足気な微笑が浮ぶ、A郎とても同じこと大体仕事を終えた頃、二人に後始末を依頼する、机の上に散乱する色紙もきちんと揃え、床の上の小さな切片も丹念に集め、鋏も一つ残さず集めて箱に納めた。他の子供達も手伝って居るが、二人の熱心なことは私も思いがけぬ程である。当番の徽章が二人の胸に輝き食前の用意、食後の片づけもよく出来た。

この人数の割合ならば全体の指導計画は二年目の子ども達を中心に考え、個々の指導場面に於いて新しい子どもの取扱いを考慮に入れて行きたいと思います。

二年目の子ども達が新しい子どもを迎えた時、自分達の一年の生活経験から生れた自信が思いやり、いたわりとなってあらわれることを望みますが、それがみくびりや親切の押売りにならないよう心を配りたいものです。

新しい子ども達に対しては、機会を捉えて自信をもたせるよう仕向けて行きましょう。

新しい子どもも古い子どもも、集団生活の中で対等の交渉をもつように指導して行きたいと思います。

（東京・感応幼稚園）